



八俣の大蛇

須佐之男命が出雲の肥の河のほとりあるを歩いていると、川上から箸はしがながれてきました。たずねて行くと、一ヶ所の家の中でおじいさんとおばあさんが、娘をかこんで泣いていました。

わけを聞くと、「わたくしたちには八人の娘がおりましたが、毎年、八俣の大蛇がやって来て一人ずつ食べ、今年もひとりだけ残ったこの娘を食べにやってきました。大蛇は頭が八つ、尾が八つ、八つの谷から八つの峰にわたる大きな体をしています。」と、答えました。

須佐之男命は、その娘を妻にくださいとおねがいし、八俣の大蛇を退治することにしました。強い酒をつくり、垣根をつくって八つの門ごとに酒さかだるをおき、その中に、その酒をいっばい入れて大蛇の来るのを待ちました。やってきた大蛇は、酒のにおいに気づき、飲みほすと酔って寝てしまいました。このときとばかり、命が剣で大蛇を切っていくと、尾の中からりっぱな剣がでてきました。命は、その剣を天照大御神にさしあげました。天叢雲剣といます。

須佐之男命は、その娘、櫛名田姫とむすばれ、出雲に御殿を建てられて、なかよくくらされました。